

## ● スナップ ●

ことばの発達に、気どり、気ぐらいの在り方を注目せねばならぬ。本号スナップでは、特にそれにしほった。

「未練だ」といわれるおそろしさ

四月の当初はそれぞれ委員や係を決める。先に学級委員に決まっていた男の子がいた。その後、運営委員という学校全体の係を決めているとき、

T「代表委員や学級委員に決っている人は仕事为重なると大変ですから、それ以外の人を投票で決めましょう。」

C<sub>1</sub>「なぜ、学級委員はいけないの。ぼくそんなら、学級委員なんて、ならなければよかった。運営委員になりたいなあ……」

その子は最後まで、投票用紙に自分の名前を書き、あきらめが悪い。開票している時も自分の名前を黒板に書いている。

C<sub>2</sub>「おい、未練だぞ」

C<sub>1</sub>は、ぼつと黒板の名前を消して席につき、それから、運営委員の事は話さない。

—— 五年生男子（四月） ——

真赤な顔をするとき

休み時間、このごろ、他のクラスの子がよく顔を出す。

C<sub>1</sub>「節子、節子、節子ブー。」

私の名を呼び捨てにする。

T「あのね、悪いけど、今度から、節ちゃんって呼んでね。」

C<sub>1</sub>「……………」

真赤な顔をして、走っていつてしまった。

—— 五年生男子（四月） ——

敵にうしろは見せない

△二年生と三年生のドッチボールV

ドッチボールをしている時、急にボールが近くにきて、逃げ場を失い、当ってしまった。それでも、必死にのめれば当たらなくても済む距離であつたし、時間もあつた。

二年生C<sub>1</sub>「どうして、逃げなかったの？」

三年生C<sub>1</sub>「敵にうしろを見せて逃げれるか。」

痛いところ

—— 三年生男子（秋） ——

入学式の日補助担任で、式の前に、ひとりひとり入ってくる子どもたちと話をしていた。

C<sub>1</sub>「ぼくね、おねえちゃん、この学校にいるんだよ。」

T「そう、いいわね。他にこの学校におねえさん、おにいさん、来ている人はいないかな。」

C<sub>2</sub>「ぼく、おにいちゃんいるけど、この学校には来ていないんだよ。」

T「あら、そう」

C<sub>2</sub>「玉川学園なんだ。」

T「へえ、それで、君は町三小ね。」

△うんと下を向いたはずみに、眼鏡が落ちたが、しばらくの間、それが拾えずにいたV

好意

—— 一年生男子（四月） ——

授業中、いつまでもノートをとっている。

違う話題に変えたのにそれでもまだ書いている。シャーペンを取り上げると、その子の視線は私の手にあるシャーペンに注がれ、全く、私の話など聞いてはいない。視線が気になるので、シャーペンを机の上に置きその上に教科書をかさねると、今度は下を向き顔を上げようとしないう。その日はシャーペンを返さずに、次の日その子の机の下に落しておいた。

その日の日記帳に「どうもありがとう」と記載してあつた。

—— 五年生女子（四月） ——

戦意

明日は二組（他のクラス）とのソフトボールの試合である。二組には野球を常時行なっている子がいて強いことははじめからわかっている。

T「明日、君たちのために、先生が、A君（野球のうまい子）に休むようにたのんであげようか。」

C<sub>1</sub>「勝てるね。」

C<sub>2</sub>「先生はぼくらを侮辱したな。死んでも、そんなこといわないでよ。」

とすごい剣幕。

—— 五年生男子（七月） ——

絶体絶命

二人ですごい取っ組み合いのけんか。周囲に色々なものもあるし、危険なので止めること

## ● スナップ ●

にした。

T「やめないか。」

やめない。私はやつとのことでひきはなし、顔をあげると二人にいった。一人はすぐ、くやしそうに顔をあげたが、もう一人は全く顔を上げる気配がない。どんな言葉をもってしてもだめだったが、

T「卑怯者め、顔もあげられないのか。」といったとたんすつと、顔をあげると、手にもつていたけしごむを地面に投げつけた。

——五年生男子（九月）——

皮肉とは馬鹿にされることなり

T「あと、二十分でこのテストを出してもらいます。」

C<sub>1</sub>「えっそんな、ひきよう。」

T「みなさんはお出来になるから。」

C<sub>2</sub>「そんな、おせじいつちやってさ。」

T「ほか、皮肉ですよ。」

それから一週間位して、やはり、同じようなことがあった。

T「むずかしい事を考えることが勉強です。

みなさんはお出来になるから。」

C<sub>1</sub>「また先生、そんなおせじいつちやってさ。」

C<sub>2</sub>「ほか、そんなこというなよ。皮肉だっていって、ばかにされるぞ。」

——五年生男子（十月）——

漢語でものいうかっことよさ

ある係に推せんされた子

C<sub>1</sub>「あの、ぼく他にやりたい係がありますの

で辞退させていただきます。」

推せんした子

C<sub>2</sub>「？。かっこつつけちゃって。」

これからこの辞退という言葉が少しはやった。

——五年生男子（五月）——

優秀の分れるところ

………しまいはんざわ君と小野口君のけんかになってしまいい、小野口君が有利な行動をとつていながら、はんざわ君は、泣きながらやつとこさつとこ抵抗をしていた状態だったので、やめさせようとしたら、小野口君はやめたのですが、はんざわ君はやめなかったの、はんざわくんだけ残して教室に入ってきたという具合でした。

——五年生男の子の日記より——

（以上、町田三小・小泉節子教諭報告）

開き直り・圧倒

「先生、けんかしてるよ。」の声に、教室に行ってみると、A君とB男がけんかのまっさい中。

A君がB男を強く押した拍子に、B男は机に顔をぶつけてしまった。B男の鼻からは鼻血がたらたら……。押したA君はびっくりして、「おまえ、鼻血、鼻血！」

ところが、B男の方は、腕で鼻血をさつと

一ふき、たった一言、

「鼻血がなんでえ。」

まわりにいた男子は「エーッ。」と声をあげる者、あぜんとする者。

それからしばらくの間、わがクラスの男子の間では、「鼻血がなんでえ。」が流行語になった。

——四年生男子（秋）——

義憤

他のクラスの先生が、わがクラスのN君をはめるのに、「う組にも、N君みたいな子がいたのか。」という言い方をした。

それを聞いていたI君が、急におこり出した。「それは失礼だ、失礼だ。」と、まっかな顔をして。

（クラスをけなされたことをおこったのか、それとも自分がはめられなかったことがくやしかったのか）

——四年生男子（九月）——

衣足らざるも礼節を知る

いつも、こさつぱりとはしているが、同じ洋服ばかり着てくる。そこで担任の先生が自分の子供のお古を持ってきて、その子にあげようとしたら、

「結構です。」ときつぱり、（でも、別にいやな顔もせず）ことわった。

因みに、その子の父親は大学教授。母親は大学講師、自宅でピアノ教授。二人ともおだやかで、教師をたててくれる。

本人は、おとなしく、他人の批判などはないが、しんはしっかりしててがんばりや。

——二年生女子——

（以上、東京・松ヶ丘小・粕谷典子教諭報告）